

令和5年度 泉大津市立図書館協議会

■第3回会議の議事概要

日 時：令和5年12月26日（火）午後6時15分～午後7時45分
場 所：泉大津市立図書館オープンセミナースペース
出 席：嶋田会長、阿児委員、岡本委員、澤谷委員、高島委員、谷合委員
公開の有無：公開

議 事

- (1) 泉大津市こどもの読書活動推進計画（案）の現状報告
- (2) 泉大津市こどもの読書活動推進計画（案）の評価について
- (3) 図書館評価について

議事概要

- (1) 泉大津市こどもの読書活動推進計画（案）の現状報告
《主な意見等の内容》

泉大津市こどもの読書推進活動計画（案）の現状を事務局より報告

- (2) 泉大津市こどもの読書活動推進計画（案）の評価について
《主な意見等の内容》

阿児委員：まず「キミと、よみドキっ！」が完成してパブリックコメントまでいけたことが素晴らしい。評価の方法については難しいところだが、一案として、実際に手に取って見てくれたこどもたちや利用者があるのであれば、評価には直結しないかもしれないが一年やってみて次の年に、「キミドキ」に載っているマンガのシーンを体験したことがあるか、またはその場面を見たことがあるかなどを、ホワイトボード大ぐらいにマンガ部分を拡大してシールを貼ってもらうだけでもいいのではないかと。シールを貼ってもらうだけでも、この活動・計画をどのくらい見たことがあるのか、体験したことがあるのかを可視化できる。数だけではどこがどうなのか全体的に見えづらい。シールが貼られたシーンとそうでないシーンが出てくるようになると、次の活動でどこに力を入れるか見えてくるので、読むだけでなく毎年見直すことができる。

評価を話し合う場の前にそのようなアンケート期間を持ってもいいのではないかと。

高島委員：まちぐるミッドは本に触れられる場所数÷市の面積、とあるが、0.63 という数字が多いか少ないのか、一般的にはどのくらいなのかがイメージできないので、1 平方キロ

メートルあたりに 1 ヶ所、2 ヶ所というような指標があれば、客観的に想像が付きやすいよう併記してあるといいのではないか。

嶋田委員：例えば半径〇km（徒歩何分以内）、というように近さやアクセスしやすさを表現したうえで指標にして、それがどのぐらい増えていくか、とすれば伝わりやすいのではないか。

谷合委員：マンガにすごく感動した。カラフルで良い。この計画案は前半がマンガでこども向け、後半は大人がこれをやるという宣言になっていると思うが、前半のマンガの部分は学校への配布や貼り出すなどの予定はあるのか。

事務局：こどもたちが持っているタブレットに送る予定にしている。

谷合委員：このような思いを持って、いつも大人がこどもと一緒にいることをわかるのが大事だと感じた。目標についてだが、目標である以上は数がずっと増えていくのは当たり前だろうが、いつか頭打ちになるのではと不安である。これは実現可能な数字なのか。読むことに関わる大人の数はずっと増えているが、どういう計画なのか。

事務局：現在の泉大津市立図書館の司書資格保有者数と学校司書の数。どちらも増えるであろうと予測しての数字である。また、まちぐるみ図書館として登録施設が広がっていくことで、関わる大人も増えるという希望数値である。

阿児委員：谷合委員が言われたように、最適な目標値が必要ではないか。増えていくのはもちろんいいことだが、増えすぎ・大きすぎの数値もあると思うので、最適な数はどのあたりかを途中で見直したほうがいい。また、サポートする人の数が増えたからこそ、まちぐるみツドが上がるなど、数値と数値の関連性もあるはずである。単体での増え方が、実は〇番と〇番が関連して増えていく、というのがなければ、人だけ増えて活動する場所がない、場所が増えたのに担っていただく人が育っていない、など、その目標値のそれぞれのバランスが見えづらいのではないか。評価値の意味を語る場合には、そのあたりが書いてある必要がある。また、単位を必ず入れた方がいい。資料数とするならば、何冊なのか？何点なのか？取組数は何件なのか？何ヶ所なのか？何人なのか？それがなければ数字だけが踊ってしまう。数を言う場合にはきちんと単位をつける必要がある。

澤谷委員：私も数字が右肩上がり続きなのが気になっている。この計画自体の終期はあるがこどもの読書活動はずっと続くので、何か先を見据えたものが見えるといいのではないか。せっかくマンガが楽しいので、次の計画はこれをこどもたちがアレンジしたり、この先のこ

とを描けるようなものになればいい。

岡本委員：ここまでできて充分画期的だと思う。既に出ている視点以外で言うと、館内にこども基本法の解説パネルが出ているのが非常にいい。こども基本法は、基本的にこども自身による政策形成への参画を強くうたっているので意見聴取をします、となっている。これについて早速、こども自身の声によって計画をさらに成長させていくことを、こども基本法の話と絡められると非常に良い。立てた後の評価の部分で、当事者の参画というところまで持って行けると完璧な流れだと考える。

嶋田委員：4 ページの3 番、「やることと関わる人」の部分だが、例えば生涯学習課の「生」、学校の「学」、指導の「指」など、抽象化された記号ではなく意味のある一文字にしてはどうか。これまでの会議のプロセスで特に意見もなく、多くの方が抵抗なくこの記号を受け入れて判別がつくのであれば問題ないが、私自身がこの凡例を何度も往復して確認したので、直観的にわかりやすい意味のある文字のほうがいいのではないかと感じた。

高島委員：マンガの部分の家でこどもに見てもらったが、友達と読めるシーンがあるのがいい、という感想だった。こどものイメージからすると、言われてはいなくとも図書館で友達と過ごすのがダメ、というのがあるようだ。図書館の使い方を明確に示してあるのは良い。個人的な感想だが、マンガが文字の情報量が多く、色も多く使ってある。色から受けるイメージも結構あるので、背景もコマによって色が違い、色々なところからの情報が入ってきて読むのが少ししんどい印象があった。もし改定するのであれば、例えばネガティブなところは背景も少し暗くするなど、色を統一したほうが伝えたいことが、より伝わるマンガになるのではないかと。また、4 ページの5 番だが、「大人へ」はアンケートなどを通してこどもたちにどんな環境を提供できるかを問うものか？

事務局：読んで終わりではなく、読んだ方が自分事として捉え、自分だったらどうだろうかを書き込める余白を作りたいと考えた。

高島委員：「こどもへ」のところも同じ意図だと思うが、もしかしたらこどもは読むために足りていないものを、こども自身のこと置き換えて、「時間が足りない」などの答えもあるのではないかと。図書館で読む、本を読むなど環境面で足りないもの、もしくは物でもっと足りないもの、などの聞き方が意図しているものに対する答えがもらえるのではないかと。

嶋田委員：5 番には「みなさまにお聞きします」のようなタイトルを入れるといいのではないだろうか。

事務局：色については、印刷する段階でプロに色の調整をしていただくことも考えている。また、大人と子どもが年に 1 回一緒に評価をする場については、子どもたちが大人に飲み込まれず、自由に自分たちの環境のことを喋る場を作りたい。

谷合委員：年に 1 回のフィードバックだが、例えば 4 月に開催したときのように、子どもたちを呼び込んで来てもらうなど具体的なイメージはあるのか。

事務局：まだイメージの段階だが、ワークショップ形式で何でも喋っていいという場を作ることが必要と考えている。

谷合委員：要するに PDCA サイクルでいえば Check の部分だが、チェックができるということは、そもそもこの「キミドキ」を知っていなければチェックができない。前提条件としてそのハードルがある。次にこの理想どおりに、「キミドキ」を見た子どもたちが今までと違って、自分たちの周囲が変わったかどうかを実感できているかどうかを聞きたい、というのはすごくいいことだがすごく難しいと思っている。

事務局：その部分にはすごく不安があったが、パブコメに書き込まれた意見を見ていると、私たちが作ったものに対して子どもたちは意外としっかりと考えてくれていて、自分に置き換えてくれていると感じているので、パブコメを書いてくれた子どもたちが来てくれると有難い。

阿児委員：集まって、数字が出てきて、それをどう思うか、ということはすごく大事だと思うが、数字を出す調査自体をワークショップにしてしまうのも有りなのではないか。例えば、読書器具がどこに設置されているかをみんなで探しに行って数えたり、エリア的にも広くて大変かもしれないが、みんなが調査員となって発見して、スマホで写真を撮って送ってもらうなどすると自分事になっていくのではないか。市役所の関係各課が数字だけを見て、増えていると判断するのではなく、20 件のうち 1 件でも具体的にイメージを持って写真を撮ってきてくれるのであれば、単に数字が書かれているのと、そのスポットに対して数字が書かれているのでは 1 つの数字の厚みが全く違ってくる。

澤谷委員：実際に調べて、この辺りにはスポットが無いのでスポットがあるといい、という声が子どもたちのほうから沸き上がるかもしれない。それを聞いた保護者が、自分の家でもできるのではないかと考えるかもしれない。自分の子どもに言われたら、やりたいと考える保護者も出てくるのではないだろうか。そうするとうまく循環するような気がしている。

岡本委員：年に 1 回の評価の場をここで行うのは違うのではないかと。街に出る方がいい。

澤谷委員の言われたことはすごく良いし、今更だがパブリックコメントを書くワークショップをやるべきだったと考える。千葉県柏市の場合は、図書館の未来像を示したときにパブコメを書くワークショップをやったことがある。これは今までにも何度かやってきているが、結構重要なプロセスだと考えている。今回の評価なども街に出て行って、実際に自分たちで評価をしてみる。全部に対してはできないが、1ヶ所でやってみてプログラムを作れば、子どもたちが他所の地域に行き回り、図書館に持ってきてくれるようになったり保護者に話したり、という流れにできると最適なのではないか。

嶋田委員：評価の具体的なアイデアを進めるところで違う局面の話をして申し訳ないが、計画推進のステップでできることを考えていて、感情図書館というのを作ろうというクラウドファンディングが行われている。子どもたちの思いを分類してその感情に当てはまる本を、ということである。阿児委員から活用シーンの体験談があるといいという意見もヒントになったが、「知りたい」「今の思いをどうにかしたい」「相談したい」という読む必要性があるシーンを集めるワークショップをして、この本が役に立つかもしれないという本とのコーディネートで司書と対話式で行うなどのステップがあるといいのではないだろうか。

(3) 図書館評価について

《主な意見等の内容》

図書館評価について、事務局より説明

谷合委員：指標についてだが、滞在時間を測ることはできるのか。貸出点数の目標が大きく下がっているのは、過剰に大きかったのだらうと思われる。従来は貸出がとにかく大切だと言われてきたが、シーブラの気持ちよさであれば家に帰って読むよりもここで読みたいと感じるのではないか。そうすると、館外貸出よりも滞在時間というのも大事な指標ではないか。みんなが集える図書館であれば滞在時間は大事だと考えるが、測るにはどうしたらいいであろう。

嶋田委員：瀬戸内市民図書館の時代にそれについて、入る時と出る時とでチェックイン・チェックアウトをしてもらうという発案があった。もちろん予算が必要だが、それならば可能ではないか。

岡本委員：札幌市図書・情報館は本が手に取られ、棚に戻されるまでの稼働時間をICタグで管理して時間を測っている。それも有りだが、期間を決めてカメラで撮って記録をする方法が、利用者の同意が必要になるが一番いい。できれば近隣大学のコンピューターサイエンス分野との共同研究という形式で、実際の利用者行動を測定するといいいのではないか。同志

社大学の佐藤翔先生が好きそうなメニューだと思う。別の観点で言うと、量的指標が無くていいのであれば、ぜひ質的評価を取り入れるほうがいい。質的評価も厳密な質的評価をした方がいいし、ある種のエピソードを収集するというのは非常に重要だと考える。特に行政評価は駄目だった部分とにかく目が行きやすいが、それがあって良かった、という声はきちんと集める。そこにある種のサクセスストーリーを集めて発信するという事は欠かせないのでやるほうがいい。併せて住民をランダムで100人ぐらいに徹底的にインタビューをして、記録していくもので残すといいのではないか。それ以外の点でいうと今あるもので、回数を追いかねない方向にいくものはなるべく気をつけたほうがいい。例えば SNS 発信件数などは、発信した回数が本当に貴重なのか、という話である。鎌倉市図書館が SNS で10年近く前に発信した「学校が始まるのが死ぬほどつらい子は、学校を休んで図書館へいらっしゃい」というメッセージはいまや伝説的だが、大きな社会的注目を集めた。バズればいいかというところが違いますが、量にいかないほうがいい。一方で市民一人あたりの資料費や数字として意味があるもの、且つ高めていくほうが原則的に望ましいものはそれでよいと考える。もう一点、蔵書点数はデジタル資料もカウントする方向がよい。館内を見て、シーブラではもっとできていいと思ったが、圧倒的に紙の本に偏重しているので、実際問題、例えば統計書などは絶対に紙の統計書を当たっている人はいないと考える。どう見ても e-stat を使っている。そういうものをきちんとここで提供していく必要があり、それを考えたときに蔵書点数が、紙の本のアナログな状態のものだけになるのはあまり好ましいことではない。もう少し包括的な捉え方で、コレクション点数のようにして数字を見直したほうがいい。そして、レファレンス件数のところだが、件数も大事だがレファレンス協同データベースに何件登録したかをぜひ入れていただきたい。ここでの活動がグローバルに見て、役に立つものとして使われているかの重要な指標である。これは非常に大きな貢献であり、実際レファレンス協同データベースにどのぐらい入っているかは、冷静にその図書館の実力をかなり示すものだと感じている。いい図書館はだいたいレファレンス協同データベースでも上位を占めている。レファレンス協同データベースの上位はちゃんとレファレンスをやっており、その内容を登録することに対して館内できちんと意思が統一されているということを感じるので入れていただきたい。

澤谷委員：デジタルアーカイブも公開されたので、デジタルアーカイブの閲覧件数などを入れるといいのではないかと。閲覧ではなく活用されているほうがいいのかもしれないが、それは難しいかもしれないので閲覧された件数を入れたらどうか。レファレンスは頭打ちをすると実感しており、大阪市立図書館でも課題ではある。最近は何件ではなく質というか、利用者がインターネットでかなり調べて来て、司書がどう回答していくかという部分をなかなか測ることができずにいる。岡本委員も言われたように、例えば次に使って欲しいものをレファレンス協同データベースに登録しておくことや、レファレンス協同データベースを見られた件数など、件数だけがすべてではないがそういうところで測ることもできるので

はないか。

谷合委員：商用データベースの利用数が実態としてはすごく少なく、目標の半分以下である。シーブラの HP からどんなデータベースがあるのか一覧はあるのか。利用案内には商用データベースがあると書いてあるが、「資料を探す」のところにはない。資料を探している人に向けて、商用データベースがあることを書いておかないと探しようがない。また、利用率が低いのはニーズと合っていないのか、広報が届いていないのかどっちであろう。もしニーズが合っていないのであれば、例えば地元の商工会議所とタイアップするなどやり方があるのではないか。

事務局：データベースの紹介は「利用案内」の中の「ビジネス支援サービス」のところで紹介している。利用が少ないのは痛いところだが、開館当初はコロナの関係で同じ端末を複数の人が触ることができなかつたため、セミナーがほとんどできなかつた。今年度から課題ごとや就活に関する各データベースのセミナーを少しずつ行っている。セミナーを行うと、そのデータベースの利用数が上がるのが目に見えているので、課題ごとに合わせた使い方のセミナーを行いつけるしかないと考えている。また、コンスタントに使っている方もいるので必要とはされている。

阿児委員：報告というのはとても難しいと思うが、この年次報告書を見ていると統計的な数値の報告であって評価書ではない。自分たちで自分たちを評価しているわけではない。量的な評価であれば A や C などとなってくるが、岡本委員からもあったように質的な評価であれば最初に掲げられているシーブラの活動理念やサービス、目指す姿に対して、職員研修で評価研修のようなものがあった方がいいのではないか。シーブラで目指す姿のどの部分を自分たちがアクションとして落とし込めたのか。対してそのアクションが利用者から反響を得られたのかどうか、一度どこかで行うといい。ミッションとアクションを順番に、その姿がきちんとできたのかどうかの一文があるといいのではないかと感じている。これを見たとき、最終的にどこに評価が書かれているのかわからなかった。あくまでもこれは統計書、白書に近いイメージ。最初の 1 ページ目にミッションが掲げられているが、例えば「活動の 3 つの柱」「サービスの 3 つの柱」「7 つの図書館像」に対して、それぞれの統計的に挙げた項目がどれに関するものなのか。例えば先ほどの商用データベース利用数だが、ビジネス支援の充実に関するものなのであることを全員で意識をする。それに対して自分たちは数値的にもこのような評価であり、質的にはイベントを組むなどすればできたのだから、そうすると商用データベース利用の部分に力を入れる方がいい、というように評価に対しての次の取り組みが入るといいのではないか。また、行政的には難しいかもしれないが、例えば統計的な数値は 3 月、評価を自分たちが行うのは 4 月にしてみてもどうか。4 月の活動計画を立てるときにもう一度自分たちを評価するなどしてみると、今後の行政サービスの

中での改革の一つにもなるのではないか。学術のプロジェクトでも、研究プロジェクトを年度が明けてから報告されるものもある。統計的・数値的なものをまず出し、それに対して自分たちが評価を下すというかたちに分けてもいいのではないか。そのような考え方であることを、今後の改革と考えてもらえるといいのではないか。

嶋田委員：これだけたくさんの事業を行っているのに、量的測定をしやすい市民との共同事業、連携事業を件数として表すといいのではないか。また、イベント実施回数やイベント参加者数、テーマ展示など、特に達成率が高いものに対しては、目標値をもっと大きくしてもよかった、或いは頑張りすぎたと考えるのか。経営資源として、どのようにバランスを取るのか悩んでいる部分やもっと配分を回せたのではないかなど、もしあればおしえていただきたい。

事務局：イベントやテーマ展示については、現在シーブラに勤務している職員は図書館勤務経験が少ない、司書資格を持たないスタッフが多く、基礎的な図書館運営をすることに時間を取られ、イベントや展示にかける時間がないのではないかという想定をしながら目標値を設定していた。しかし、蓋を開けてみるとイベントにしても一つきっかけを作ると毎月・毎週ときちんとスタッフが運営できていた。テーマ展示についても棚担当や事業担当になると発信したいものが出てくるので、資料や棚をじっくり見て蔵書構成に繋がっていくことがだんだんスタッフもわかってきて、魅せる展示の重要性に気づき、目標値のことを言わずとも自然と増えていった。

谷合委員：良い方向に回転しているのは素晴らしく、その数字もだんだん落ち着いてくると思うが、そうなったときに「キミドキ」のときに話していた司書職の数を増やすという話になると、元々司書資格を持っていなかった人たちがこれから司書講習を受けるのか、もしくは新規採用で司書資格を持っているのを条件にするのか難しいだろうと考えていた。いろいろな数値が少しずつ高くなる目標がある中で、資料購入費だけが動かないのは寂しいところである。

岡本委員：視察がどのくらい来ているのかは、別の観点から評価に入れてもいいのではないか。実際関西圏においては、泉大津市立図書館が視察されていると考えられる。政策的な波及効果にもなるので、これはしっかり入れるほうがいいし、この報告を読む市民や議員にとってもしっかり認識を持っていただくために非常に重要である。伊万里市民図書館が古瀬館長の時代に視察数を出すようにしたと話されていたのが印象的だった。それはとても大事なことで、大きな評価でもある。実際、業界的には視察回数が多い自治体ランキングがあるので、測定して記録に残しておいたほうがいい。また、是非職員による研究発表の本数もきちんと記録として出したほうがいい。CiNii 論文検索などで調べると 2022 年からでも 3

本あり、この規模の市町村立図書館では十分あるほうである。このような記録が残っているのは重要である。

谷合委員：岡本委員の話の続きだが、エル・ライブラリーでもメディア情報をカウントしている。論文だけでなく、新聞や雑誌記事などに取り上げられたり WEB サイトで言及されたことを、そのたびにブログや SNS で発信し、一年分を理事会などで出しているの、それはすごくいい資料ではないだろうか。メディア情報は論文に限らず何でもいいと思う。

高島委員：市民として一人あたりの貸出点数の目標値が下がっているのは非常に寂しいが、これは実情に合わせた数字で仕方がないのだろう。ただ、来館者数は目標が増えていたりイベントの回数が増えている。やはり市民は本を読む空間としてだけではなく、色々な体験ができ、新たな情報に触れる場としてシーブラを認識しているのが読み取れ、シーブラのコンセプトに合っているのであろう。イベントの回数は 2024 年度は 350 回ということで、ほぼ毎日何かしらのイベントをしているのだと思うが、この中に市民側が企画したイベントが入っていないのであれば、件数として入れてもらった方がよい。利用者からすれば、図書館が企画したものか市民が企画したものか区別がつかないと思うのと、市民と共同しているような実態が何かしらの数字でわかればよいのではないか。

阿児委員：最初のほうで蔵書数に電子書籍の点数も入れた方がいいという話をしたが、ORIAM digital history のコンテンツ数なども大事だと考える。電子的に活用されるものとして ORIAM digital history にどれだけ入っているのか、また GIGA スクール端末を通じて利用されるとき、それが活用されるようになるかどうか、デジタルコンテンツは数の勝負になる部分もあるので、しょぼいと思われたら二度と使われない。しかし、こんなものがあるのかと思ってもらえればどんどん掘り下げて使われる。どのぐらいのペースで増やしているのか、点数的に増やすのか、分野が増えたのか、朴斎文庫は何パーセント達成したかなどは達成率で出せると思うので、2023 年には含めていただくほうがいい。

嶋田委員：評価指標ではないが、関心を持って見ているのが蔵書構成のところである。NDC 一次区分表の十分類であるが、蔵書数の比率が書かれているが、社会科学が出版の実態に近い。古い研究だが、2012 年に実際に池内淳先生が図書館に入っている十分類のそれぞれの蔵書構成と出版統計の大規模な抽出調査をされた。主題の違いは当然違いがあるが、図書館では文学の比率が高く、社会科学は 10% いかない数字だった。シーブラは比率が高いので、ニーズやイベントを持つ中で、しっかり選書をしているということだが、分類別貸出統計と照らし合わせて見て、実際どのくらい回っているかも気になっている。現役のときには回転率を見ながら潜在的なニーズを測って選書のヒントにしていた。実際選書に活かすには 3 桁ベースだと思うが、この図書館での蔵書がどう構成され、どう使われているのか。

そこにミスマッチがないのかも指標になるのではないかと考えた。新刊の点数には専門書も一般書もあるので、一概に公共図書館で、また泉大津市で利用されることとの整合性について何かを言えるわけではないが、公共図書館の各主題分類があまりにも来館利用者に偏重しているのではないかと疑っている。潜在的な利用者である未の利用者、住民に対してアジャストしているか。もちろん使われないものを揃えても仕方ないということもあるが、まず無ければ使えようがない。2020年に終了したが、毎日新聞が読書世論調査で図書館利用について聞いている。順位は低いけど図書館を利用しない理由に、図書館に行っても使いたい資料・借りたい資料がない、という理由がある。そういう意味では泉大津市はフランクな雰囲気を作りながらも選書ではかなりチャレンジしていることが棚を見てもわかるし、利用とのバランスのところ難しい問題でもあるが、社会科学の分野が15%はすごいと関心を持っている。

岡本委員：嶋田委員に触発されて思うが、ぜひ利用者の居住地の統計を取っていただきたい。近隣自治体でシーブラを利用しているという声を明らかに聞く。例えば岸和田市で市民ワークショップを行うと、まずここが引き合いに出される。明らかに周辺自治体の中で特異圏になっている。そしてある種の参照ポイントになっているのは間違いない。そこはどのような利用形態になっているのかを知りたいし、同時に市民サービスとして考えたときにどうあることが望ましいのかケアも必要である。例えば東京都武蔵野市の武蔵野プレイスは年間200万人の利用者だが、200万人のうちの8割方が市外利用で課題といえば課題である。一方でそれが戦略として見せるのであればそれで悪くないのかもしれない。いずれにしてもそこを明らかにしたほうがいい。特に本市のように比較的小さな自治体で、周辺自治体から集客できているのであれば、それこそがビジネス支援になっている。そうなるとうしろ来た方がこの後どこに行っているのかを調べてみるとか、ここに来る前にどこに寄っているのか。特にそれこそ1、2回メディアの活性化に繋がっているのかなどが取れると、事業の意義をより説明できるように思われる。

澤谷委員：こどもの読書の繋がりに言えば、せっかく年齢ごとの登録者数も書いてあるので、こども読書活動推進計画ができ、その取り組みをもって次年度の報告書に活かせるよう、例えばこどもたちが登録してくれるようになった、などの項目があるといい。

嶋田委員：質的調査のことからアンケートという声もあったが、例えば開館される前、あるいは開館以降、来館者の満足度調査や意識調査などをされたことはあるのか。若しくは今後の予定などでもあればおしえてほしい。

事務局：これまでも行ってない。今後も特に予定はない。

澤谷委員：それであれば、来館者ではなく来館者以外側の把握のほうがいいのではないかと考えている。来館者は満足しているから来るのであって、図書館に来ない方がどのように考えているのかが、次のところに活かせるのではないかと考えている。また、意見や要望があがってくるケースもいいのではないかと考えている。図書館や行政に届く声はわりと苦情が多いが、苦情というのは全体の中の 3 パーセントぐらいで、都市の規模の大小にかかわらず割合は決まっているというのを耳にしたことがある。たくさん寄せられているようでも、実は全体の 3 パーセントであれば、本当はもっと良いと言っている人がいることが分かたりするのではないかと考えている。それは期待も込めて言ってくださっていると思うので、新たな指標ではなくとも重要だと考える。

嶋田委員：全市民に向けてということであれば、2 年に 1 回まちづくり意識調査というものを行っていると思うが、そこに図書館についての質問項目を入れるといいのではないかと考えている。瀬戸内市民図書館時代には、主に来館しない理由などを尋ねた。

谷合委員：中央大学の長谷川幸代さんが出された「公共図書館の利用・非利用に関わる要因の分析と考察」という論文がある。何故来ないのかを本当に調査して分析をされているので、何かのヒントになるのではないかと考えている。

岡本委員：これは提案だが、電子資料・デジタル資料の活用を積極的にやっていただきたい。多分、図書館は往々にしてオンラインデータベースの話に行きがちだが、ちょっと一足飛びすぎだと思われる。オンラインデータベースの事業者には申し訳ないが、実際オンラインデータベースではなくとも、十分役に立つ優れた web リソースも多い。最近で言えば、「がん情報サービス」は非常に有用であることは、明らかに戦略的にやっているもので、図書館関係者も広く実感するところだと思う。今またそこに戻るのかとは思いますが、そういった役に立つ Web 情報源をきちんとガイドするというのが非常に必要になってきている。ただし、従来の一つの失敗は、リンク集として提供するのは役に立たない。書架の中にその本ではなく、役に立つ Web 情報源があることを指し示すことが非常に重要だと思っており、そこを熱心にやって今後の課題にしていきたい。私自身も毎週メールマガジンでそのような記事を紹介しているが、ぜひそういう部分に本腰を入れ、泉大津市立図書館に先例を作っていただきたい。いろいろな新館を建てているところでも言っているが、いまいちリアリティがなくて伝わらない。ここでやれば伝えやすく、泉大津の図書館自体が図書館変革の中規模にできる、採用しやすいモデルである。そこでこのデジタルの取り組みに本腰を入れるといいのではないかと考えている。そうすれば利用の在り方も変わり、またせつかく若い世代が来ているので、彼ら彼女らにこういうものが使えるということを伝達できる効果はかなり大きいと思う。

阿児委員：今の話を聞いていて、嶋田委員や谷合委員などいろいろな研究者の方が図書館の

活動や蔵書比率などを分析している方がおられ、更にシーブラで出しているものが論文に載って、メディアに取り上げられ注目されるとなれば、PDF では非常にもったいない。統計的なデータであれば、自治体のオープンデータのような形がいい。報告書としては PDF が印刷しやすいが、市の情報担当と協力してシーブラの統計データ集を提供できれば、使いやすいのでみんなが使う。論文などに取り上げられて、学生もシーブラのデータをベースにして他館との比較を行うなどの軸になってくるかもしれない。となれば、そのような発信も有りではないか。そういった提案をしていくのも、図書館の在り方や評価、統計データを出していく形としては評価できたり、他の図書館からの注目を浴びることになっていくのではないか。

岡本委員：阿児委員が言われていることは是非おすすめしたい。仕事としてデータセットを作って公開することを長年やってきたが、Yahoo!知恵袋が鳴かず飛ばずの時代からデータセットを作ったのは、当時何もなかったのですごく効果があり、みんながそれを使って研究をする。それがある種のスタンダードになってくる。実際に大学でそれを使って修論を書いた学生が入社するようになり、Yahoo!知恵袋のコア部分の開発をするようになった。図書館ではまだやっているところがない。だからここで泉大津データのようなものを作って卒論・修論指導が行われるようになると、ものすごい効果があるのではないかと思う。今までの会議の中でも話題にしてきたが、自治体として泉大津のユニークな質は小ささだと考える。この規模感是指標として非常に役に立つ。距離が広い、人口が多い自治体は参照しにくい、泉大津は非常にいいサイズである。決して大きくないが、まあまあ人口は多い。普通に掛け算してこれぐらい、という想定がしやすい規模。そこでデータセットを作るとかなり普及版になるのではないか。

阿児委員：さっきの読書活動推進計画の話だが、例えば場所が増えたというところで、リストを作るときにはその場所の位置情報を入れると、まちぐるミッドもちょうどいい密度感で点在しているのが地理空間的に分析もできる。そうすると、ただ単なる件数以上の意味を持つデータになり、補助具の設置場所やまちぐるミッドでの情報に触れられる場所が、数よりも何処にあることが意味を持ち、自分の住んでいるところがちょうどいい距離に全部あるのが見える。数分以内に情報に触れられる、などが地理空間的にわかるようになってくると、すごく大きな意味を持ち、まさに図書館でそういった研究をしたい人が山ほどいるのではないか。図書館がコアになって、学校図書館もあり、街中にもある良い密度感、文化状況にあるのが泉大津市である、ということが見えると、やはり数で見えているところとは全く違う見え方があると思う。そうすると、もしかしたら、図書館側からできなくてもいいが、データを提供する、誰かがしてくれる。そのワークショップをして、みんなでプロットしてみるといい。そうすると評価の形というのもできてくるのではないか。ここは空白地帯があるので何とかしたい、という声も出てくるかもしれない。そのようにすると、商用データベ

ースと組み合わせてみたらいろんな見え方がでてくることもあるので、岡本委員も言われるように、やはりせっかく作ったデータを次に使えるようにして、報告を次の活動の手がかりにしていけるようにするのが大事なのではと感じた。

嶋田委員：そうすると地区ごとの人口やどのような人が住んでいるのか、濃淡があって優先順位が決まるのではないだろうか。また、子どもたちからの評価という観点というと、学校図書館からの協力を得て、子どもたちから図書館がどう見えているか、という視点があるのではないか。

澤谷委員：既に意識されているかもしれないが、指標は出せば出すほどややこしくなる。計画との関連性や、それが何に基づいているかをしっかりと押さえておくとよい。阿児委員が言われたように、最初に目標があって何に基づいていてこの数字になっている、ということを整理されるとわかりやすいのではないか。

終了 19:45